

「平泉文化総合的研究基本計画」策定の趣旨（その1）

岩手県教育委員会

1 経緯

○研究基本資料の蓄積

12世紀末に奥州藤原氏が滅亡し、その後大規模な開発を免れたため、いわゆる「平泉文化」を構成した文化財は今日に非常によく伝えられている。そのため、「平泉文化」を解明するための視角としては、建造物や仏像などの仏教美術資料、当時の記録類などの歴史資料、陶磁器や建物遺構などの考古資料などがあり、多角的観点から学術研究が進められてきた。「中尊寺と藤原四代 中尊寺学術調査報告」（1950）や「国宝中尊寺金色堂保存修理工事報告書」（1968）、「奥州藤原史料」（1959）、「無量光院跡」（1954）、「平泉 毛越寺と観自在王院の研究」（1961）などは、昭和年間におけるそれぞれを代表する基本資料となっていて、当教育委員会でもまた「奥州平泉文書」（1958）や、「平泉遺跡群柳之御所遺跡発掘調査報告書」（1993～）等を発刊し、文化財の保護と同時に学術情報の提供を行ってきた。しかし、研究体制についていえば、あるテーマのもとに臨時的に組織編成されるにとどまっていたため、この段階では研究の多くを研究者の個人的努力に依存していたともいえる。また、発掘調査がほぼ寺院境内に限られていた段階では、平泉文化研究の題材が仏教美術及び文献史料に偏っていたことは否めない。

○平泉研究への関心の高揚

昭和63年（1988）に始まった柳之御所遺跡の発掘調査は、対象が約5万㎡で、それまでの平泉町内で行われてきた発掘調査と桁違いの面積であったばかりでなく、その内容もまたそれまでの平泉認識を大きく変えるものであった。出土する考古資料中には文字が記された資料も少なからず含まれていた。また、従来の学問的手法のみでは解決が困難な課題も多く見出されることとなった。この結果、平泉文化に対する考古学界・歴史学界の認識が飛躍的に高揚したことは当然であるが、同時に、柳之御所遺跡の保存要望のための署名が20万人を超えたことから、平泉が多くの人々の関心を集める対象であることが明らかとなった。

この段階では、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、及び平泉町教育委員会内の同様の組織である平泉町文化財センターが、平泉文化の考古学的研究に非常に大きな役割を果たしている。しかし、両組織の業務内容は、文化財保護法に基づき、開発行為によってやむを得ず消滅する遺跡を記録保存するための発掘調査を主業務とするものであった。そのため、学問的課題への対応という観点においては、その体制や継続性が保証されているものではなかった。

○研究機関整備に向けた動き

このような理由から、当教育委員会では柳之御所遺跡をはじめとする平泉遺跡群の発掘によって得られた成果を、学術的な観点から組織的・体系的・継続的に県民等に還元していく必要性を強く認識することとなった。平泉の考古学的調査が進展するにしたがって、平泉文化を総合的に研究する必要性は各方面での共通認識であったが、その一方で、体系的に平泉文化を研究している機関は国・県その他においてもまったく存在していなかったためである。

考古学研究機関整備基本構想

(平成7年3月 教育長決裁)

1 目的

岩手の大地には、各時代の多くの優れた文化財が所在している。とりわけ、柳之御所遺跡をはじめとする奥州藤原氏関連の遺跡群は、古代末期から中世初期にかけて日本歴史の空白期を埋める全国的にも類例のない極めて貴重なものである。平泉文化は本県を代表するだけでなく、広く北日本、さらにはアジア世界をも含む地域性と国際性を兼ね備えた文化であり、日本歴史学の研究の進歩のため、全国からその解明が待望されている。

他方、本格的生涯学習社会を迎え、県民の間に郷土の歴史や文化財に対する興味・関心が高まっている。21世紀に向けて県民が新しい地域文化を創造するに当たり、先人の残した文化財はその核となり得るものとして極めて現代的な意義を有している。

このような状況に鑑み、平泉文化を総合的に調査研究し、その成果を公開・活用することにより、日本歴史学の進歩発展と生涯学習の促進に寄与することを目的として、新たな考古学研究機関を整備する。

2 基本的性格

上記の目的に鑑み、この機関の基本的性格を次のとおりとする。

- (1) 柳之御所遺跡などの奥州藤原氏関連遺跡群の調査に基づき、平泉文化を主要な研究テーマとする研究機能と、資料及び情報などの研究の成果を広く県民に提供・活用する生涯学習関連施設としての機能を併せ持つ機関とする。
- (2) 研究は岩手県内の平泉文化に留まらず、広く東北地方、日本全域、さらにはアジアとの関連を視野にいたした国際的なものとする。
- (3) 研究は考古学及び関連する諸科学による学際的なものとし、内外の機関や研究者との活発な交流により推進するものとする。

3 名称

この機関の名称を岩手県立平泉文化研究所とする。

4 運営方針

高度な研究を推進し、その成果を提供するため、この機関の運営方針を次のとおりとする。

- (1) 柳之御所遺跡をはじめとする奥州藤原氏関連の遺跡群の調査に基づき、平泉文化をテーマとして、大学や研究機関との共同研究等を行うことにより、平泉文化に係る高度で学際的・国際的な総合研究を行う。
- (2) 平泉文化研究に係る中核的施設としての役割を果たすため、資料・情報の収集・整理・提供を行う。
- (3) 調査研究の成果は復元・整備や展示により一般に公開するとともに、学習のカリキュラム等を整備することにより、生涯学習の場と機会を提供する。

5 機能及び事業

上記の運営方針を実現するため、この機関の機能及び事業を次のとおりとする。

(1) 調査・研究活動

平泉文化を対象とした考古学的調査を行い、学際的・国際的な研究活動を展開する。

(2) 出土文化財の研究と保存・活用

発掘調査等によって得られた各種の文化財について総合的に研究するとともに、自然科学的分析や保存処理等を行うことにより、その保存・活用を図る。

(3) 平泉文化に関する資料・情報の体系的収集・管理と提供

平泉文化に関連する資料や情報を体系的に整備して調査研究に資するとともに、研究者の多様なニーズに対応する。

(4) 調査・研究の成果の平易な展示・公開

調査・研究活動によって得られた高度な学問的成果については視聴覚機器等と導入するなど平易な展示・公開につとめ、歴史や文化を親しみやすく追体験できる学習の場を提供し活用を図る。

(5) 生涯学習に対応する協力活動

県民の多様なニーズに対応可能な学習カリキュラム、情報提供方法の整備等を行う。

6 組織

この機関の組織を次のとおりとする。

- (1) 研究機関に所長を置き、そのもとに管理部門、研究部門、展示学習部門を設けて運営に当たる。
- (2) 研究機関の機能を十分に発揮するため、専門家からなる所長の諮問機関を設置する。
- (3) 研究活動の中心となる各分野の専門職員の充実に努める。

7 立地条件

この機関の立地条件を次のとおりとする。

- (1) 主たる研究テーマである平泉文化に関連する遺跡に近接した場所とする。
- (2) 交通の便が良く、全県的、さらには全国的な見地から、多くの人が利用しやすい場所とする。
- (3) 十分な広さが確保出来る場所とする。

8 規模及び構造

この機関の規模及び構造を次のとおりとする。

- (1) 敷地面積及び建物の規模・構造については、研究機関の機能が充足されるよう配慮する。
- (2) 建物は遺跡等の周辺の環境と調和し、ゆとりのある空間として親しまれる端正で落ちついた明るいイメージをもつものとする。
- (3) 収蔵庫は、出土文化財を適切に保存できる十分な規模のものとし、また、将来的な収蔵品の増加にも対応していくものとする。

考古学研究機関の整備に係る調査研究協力者会議委員名簿

(50音順、役職等は当時)

氏名	役職等	専門分野
岡田 茂弘	国立歴史民俗博物館情報資料部長	考古学（元多賀城跡調査研究所長）
河原 純之	千葉大学教授	考古学（元朝倉氏遺跡調査研究所長）
金野 静一	岩手県立博物館長	民俗学
草間 俊一	岩手大学名誉教授	考古学
工藤 雅樹	福島大学教授	考古学
小林 清治	東北学院大学教授	中世史
佐藤 巧	岩手県文化財保護審議会会長 東北大学名誉教授	建築史
高橋 富雄	盛岡大学学長 福島県立博物館長	東北古代史
富樫 泰時	弘田柁跡調査事務所長 秋田県立埋蔵文化財センター所長	考古学
樋口 隆康	権原考古学研究所所長	考古学（東アジア）
吉岡 康暢	国立歴史民俗博物館教授	中世考古学（陶磁史）

そのため、平成5年（1993）には「歴史的文化遺産の活用に関する懇談会」を開催し、学術機関の必要性について討論を行った。その懇談結果をうけ、平成6年度には「考古学研究機関の整備に係る調査研究協力者会議」を立ちあげ、考古学研究機関設置の検討に着手し、「平泉文化研究機関整備基本構想」を策定した（注）。この中では、先端的な研究を行っていくために、考古学的方法を軸として関連する諸科学が連携した学際的方法、及び平泉文化を単なる一地方史としてではなく、アジア的な視点から国際的にとらえていく必要性について強調している。

○平泉文化研究機関整備推進事業

その後、基本計画の策定の準備を進めたものの、施設設置に先行して研究の核となる柳之御所遺跡の発掘調査による資料の蓄積や平泉研究者ネットワークの形成、若手研究者の人材育成などが急務と考えられたことから、平成12年（2000）から10ヵ年の平泉文化研究機関整備推進事業を展開した。

整備推進事業の内容は、考古学を主とした平泉文化について、県の調査員と外部研究者の共同研究が骨格となり、その成果を「平泉文化フォーラム」及び「平泉文化研究年報」により公表するというものである。研究テーマは長期テーマを「12世紀東アジアにおける平泉文化の意義」とし、3ヵ年ごとにサブテーマを設定した。この間、平成13年（2001）には「平泉の文化遺産」がユネスコ世界遺産暫定リストに掲載されたことから、当初設定したテーマは非常に時宜を得たものとなった。これまでの9ヵ年の研究成果については、10年目にあたる平成21年度に総括的成果報告を予定している。

○「平泉文化の総合的研究計画」の策定

以上の第1期研究計画が終盤を迎えていることから、本（平成20）年度は、次の第2期研究計画を策定することとした。計画策定にあたり特に留意した点は、以下の3点である。

- ・柳之御所遺跡を中核とした平泉遺跡群の発掘調査成果に基づく、考古学的研究を中核とすること
- ・考古学的資料に限らず、平泉文化研究のために必要な資料の集積を行うこと
- ・共同研究については、引き続き全国的な研究者ネットワーク形成を図るとともに、地域研究者との緊密な連携が必要であるとの認識から、県内研究機関等との連携を進めること

特に、県内大学との研究連携については、すでに平成18年度より岩手大学及び岩手大学等の一部研究グループと合同で「平泉文化フォーラム」を開催してきたところである。また、本基本計画は昨（平成19）年度末より上記大学等と協議を重ねた上で策定したものである。

なお、総合的研究計画は、「基本構想」に示す本格的な平泉文化研究所（仮称）へのステップとして、岩手県教育委員会が平泉町に設置している「平泉遺跡群調査事務所」を基盤として実践しようとするものである。

2 平泉文化研究機関整備推進事業とその成果

○テーマの設定

平泉文化研究機関整備推進事業は、平成12年度からまず10ヵ年の計画で進められた。「研究施設」の整備を優先させるのではなく、施設整備の基盤を確立しようとするものである。事業の眼目は、①平泉文化研究者の全国的ネットワークを形成し研究者の裾野を広げること、及び②次代の平泉研究を担う人材の育成を図ること、である。また、単なる外部への委託研究とした場合に、県が主体となって研究を進めていくという本来の趣旨から逸脱することが懸念された。そのため、県教育委員会の柳之御所班を核とするスタッフが、外部の研究者と共同で研究を実施していくという方法を用いることとした。研究成果をより確実なものとするため、長期の研究テーマを「12世紀東アジアにおける平泉

表1 平泉文化共同研究・平泉文化フォーラム実績一覧〔平成12～20年度〕

平泉文化共同研究		平泉文化フォーラム	
共同研究者	研究テーマ	成果品	基調講演者
前川 要 八重樫忠節 吉田 敏 前川任代	中世平泉における都市性の成立と展開 時間軸としての遺物 日中都市の比較研究に向けて 平泉の調査 平泉の土器の「いろ」を考える 平泉藤原氏の支配領域 白河・鳥羽・平泉 平泉における貿易動向 考古学から見た東北北部における中世社会の確立 日本史の中での平泉 平泉の都の構造 歌枕の用例分析からみる平安中期東北支配の推移 平安時代後期における平土のイメージと建築造形 中世都市圏の歴史を探る その1 安徳氏の「都」の構造 平泉成立前後における土器様式の変遷	平泉文化研究 年報第1号	高橋利男 本中 眞
前川 要 八重樫忠節 吉田 敏 陸矢智男	中世平泉の市街地形成 「聖地」平泉 清衡の平泉創造 平泉文化と北方交易 12世紀御之御所における獨立柱建物の研究	平泉文化研究 年報第2号	岩手県立博物館 〔財〕岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター
前川 要 八重樫忠節 吉田 敏 別原智幸	中世平泉の市街地形成 「聖地」平泉 清衡の平泉創造 平泉文化と北方交易 平泉と鎌倉	平泉文化研究 年報第3号	岩手県教育委員会 平泉町教育委員会
富島善幸 岡 隆一郎 沼津直人 井出晴夫	平安時代後期京朝の伽藍とも随寺・随持寺 中世都市圏の歴史を探る その2 安徳氏の「都」の構造 (2) 御之御所付近の沖積地の河川氾濫と河道成跡の検出	平泉文化研究 年報第4号	岩手県教育委員会 衣川村教育委員会 前沢町教育委員会
富島善幸 岡 隆一郎 沼津直人 野中宗洋子	平安時代後期京朝の伽藍とも随寺・随持寺 中世都市圏の歴史を探る その3 安徳氏の「都」の構造 (3) 御之御所遺跡出土の瓦	平泉文化研究 年報第5号	岩手県教育委員会 〔財〕岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター 平泉町文化財センター
磯野 健 前川任代 野根達人 鳥山愛子	中世平泉の市街地形成 「聖地」平泉 清衡の平泉創造 平泉文化と北方交易 12世紀御之御所における獨立柱建物の研究	平泉文化研究 年報第6号	岩手県教育委員会 〔財〕岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター 一関市教育委員会
磯野 健 前川任代 野根達人 鈴木弘太	中世平泉の市街地形成 「聖地」平泉 清衡の平泉創造 平泉文化と北方交易 平泉と鎌倉	平泉文化研究 年報第7号	岩手県教育委員会 〔財〕岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター 一関市教育委員会
磯野 健 前川任代 野根達人 鈴木智司	中世平泉の市街地形成 「聖地」平泉 清衡の平泉創造 平泉文化と北方交易 12世紀御之御所における獨立柱建物の研究	平泉文化研究 年報第8号	岩手県教育委員会 〔財〕岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター 奥州市教育委員会

文化の意義」と設定し、3ヵ年ごとにサブテーマを設定した。サブテーマは以下のとおり。

平成12年度～14年度 都市平泉の構造と平泉藤原氏の支配基盤

平成15年度～17年度 世界遺産としての平泉文化

平成18年度～20年度 国家と異民族の関係性

○共同研究

共同研究は、サブテーマごとに3ヵ年継続で中堅研究者とともに実施する共同研究Aと、若手研究者と単年度で実施する共同研究Bの2種類とし、いずれも全国から公募した。共同研究者の採択にあたっては、単に独創的・先端的研究であるばかりでなく、平泉が主たる研究対象となっているか、具体的な研究成果が見込まれるか、また、柳之御所遺跡の整備計画に資する内容であるか、などが考慮された。特に研究Bにおいては、現地平泉における10日間以上の研究活動を義務付け、この事業が目的とする平泉の研究が、発掘調査などフィールドに立脚したものを期待することを明確にした。

○成果の公開

共同研究の成果は、毎年度1回刊行する「平泉文化研究年報」及び毎年度1回実施する「平泉文化フォーラム」において行っている。前者は学術定期刊行物の体裁のもので、おもに平泉文化をはじめとする各方面の学会・専門家に対して向けたものである。A4判で500部刊行し、岩手県内はもとより、全国の大学・研究所・博物館・図書館等に配布している。後者は平泉文化に興味関心をもつあらゆる層を対象とした、研究報告会・講演会形式のもので、同時に最新の発掘調査成果についても報告している。会場は、平泉町周辺の市町を中心に設定している。「フォーラム」の趣旨のひとつが、平泉文化研究者間の情報交流の場を提供するというところから、報告内容には高度な調査研究成果が含まれている。同時に、一般にわかりやすい表現となるよう、留意しているところである。

共同研究者に対しては、予算の範囲内で謝金を支給している。また、共同研究によって得られた学術的成果については、共同研究者と県とで共有することとしている。この9年間で共同研究によって得られた成果等は別表のとおりである。

○研究事業の課題

今般、第1期の研究計画を総括するにあたって、いくつかの検討課題が浮かび上がっている。課題は、次の3点に集約される。

1 長期テーマ、サブテーマを設定しながらも、各年度の共同研究が必ずしもその内容に即したものでなかったこと。この点に関しては、共同研究員の募集及び採択に際して、サブテーマを十分考慮しえなかったということがあげられる。長期テーマである「12世紀東アジアにおける平泉文化の意義」を構成するテーマとして、前掲のサブテーマが重要な主題設定であることは疑いないとしても、実質的に、限られた時間と予算の中で何を研究主題とすべきかについては、共同研究者個々に依存する部分が大きかったためである。したがって、第1期研究計画においてサブテーマに対する追求が十分でなかったことは、今後のテーマ設定において留意されなければならない。しかし、このことは、個々の研究内容の長期テーマに対する貢献を否定するものではなく、むしろ、共同研究者の個性が十分に反映された結果、平泉文化研究を大きく前進させることができたといえよう。

2 平泉文化研究者のネットワーク形成の場としての「フォーラム」が、十分な役割を果たしたとは言いがたかったこと。この点に関しては、「平泉文化フォーラム」への参加者が平泉文化に興味関心をもつ広い層に及んでいることがひとつの要因である。先端的な学術情報の交換の場、そのような情報を有する研究者交流の場が第一義的な趣旨ではあるものの、純粋な学会とは異なり、平泉文化の普及啓発の場という性格を少なからず含んでいる。このことが、結果として「フォーラム」の位置づ

けをあいまいなものとする事となっている。また、近年では、関係市町が独自に類似の企画を行っていることもあり、「情報集約の場」についても分散傾向が見られるようになっている。

3 単年度の共同研究を行った若手研究者が、その後必ずしも平泉を主たる研究対象としているとはいいがたく、研究人材育成のための多面的支援が必要と考えられること。この点に関しては、大学や大学院等で平泉文化に関連する内容を専攻した場合であっても、その後、その研究内容を継続・発展できる就業先がないということがあげられる。平泉文化に対しては多方面からの研究が可能であるが、実質的には「新発見資料」に依存する部分が多く、「常に新規の平泉関連資料にアクセス可能な環境」でない限り、研究を継続していくことは困難であろう。先端的な平泉文化研究の多くが、埋蔵文化財調査機関等に所属する行政担当者によって、考古学的研究をベースに行われている現状がこのことを如実に物語っている。

○新計画の策定

今年度策定する「平泉文化の総合的研究計画」は、以上の課題を踏まえたものである。その骨子は、以下のとおりである。

1. 平成21年度（2009）から30年度（2018）までの10ヵ年計画とする。
2. 共同研究者と県との共同研究という方法を継続する。
3. 研究テーマの設定にあたっては、長期テーマを考慮しつつも、より広い研究者層が参画可能となるようにサブテーマを細分し、いずれも10ヵ年継続する。
4. 全国的な研究者ネットワークの形成を図りながらも、地域に所在する研究資料に立脚するとともに地域の研究者と連携を深め、継続的に研究実績が蓄積されるようにする。
5. 従前の平泉文化フォーラムは継続するが、より専門的な研究集會を別途開催する。
6. 研究の蓄積を踏まえ、平泉文化研究所（仮称）基本計画を策定し、研究機関の整備を行う。

次節でこれらの内容について解説する。

3 研究計画の内容

○研究体制

研究体制は次の機関・個人で構成される（図1）。

- ・岩手県教育委員会（平泉遺跡群調査事務所）
- ・いわて高等教育コンソーシアム
 - 県内大学（平泉研究に関わるのは岩手大学・岩手県立大学・盛岡大学）
- ・県関係機関
 - 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（以下、県埋蔵文化財センターという）
 - 岩手県立博物館
- ・共同研究者
 - 公募により委嘱する外部研究者（主に中堅・若手研究者）
- ・関係市町村
 - 現状で未確定 平泉町および奥州市・一関市・紫波町・盛岡市、等

研究体制は図1のとおり3つの枠組みからなる。県教育委員会を中心とする「平泉文化共同研究」、共同研究と重なって、それを包括する「平泉文化総合的研究基本計画」、およびそれらと連携する県内大学の「いわて高等教育コンソーシアム」である。

(A) 「平泉文化共同研究」

県教育委員会、実態的には生涯学習文化課柳之御所担当で構成される「平泉遺跡群調査事務所」を中心とする枠組みである。「柳之御所遺跡の考古学的研究」および各テーマ研究の推進、研究成

上述の枠組み①に含まれず、主に平泉文化フォーラムでの発表という形での参加を想定したものである。県立博物館および関係市長村（現時点では未定、検討中）が当枠組みに含まれる。

県立博物館は既に独自計画による平泉研究に着手し、進めている状況である。

県立博物館は独自計画により「前平泉文化」についての調査・研究を推進しているところであり、これまで長者ヶ原鹿寺跡（奥州市衣川区）、豊田館跡（奥州市江刺区）について内容確認調査を行ってきた。県教育委員会と県立博物館との協議により、県立博物館は総合的研究計画の枠組みには位置づけられるものの、「平泉文化共同研究」体制に直接は参加せず、当面（平成22年度まで）は独自計画による「前平泉文化」研究を継続することとなった。

また、平泉文化の拠点たる平泉町、平泉文化関係資産を有する周辺自治体と連携して研究を進めていく必要がある。地元である平泉町および周辺の一関市・奥州市が考えられるが、21年3月時点では関係自治体との協議は未だ実施しておらず、次年度以降に協議を進めて行く方針である。

(C) いわて高等教育コンソーシアム

県内大学連携の枠組みのうち、「地域文化研究の推進」プロジェクトの平泉部門である。考古学・歴史学の枠に止まらず、大学研究者がそれぞれの専門分野から平泉文化研究に取り組んでいく学際的研究の枠組みである。「柳之御所遺跡の考古学的研究」を除いたテーマ研究②～⑤を推進していく主体である。各テーマ研究は県内大学研究者による研究チーム「平泉文化研究会」（仮称）を主体として進められ、これに県教育委員会職員・県埋蔵文化財センター調査員等が、また必要に応じて外部研究者が参加して研究・討議を行う。平成22年度以降、これまでの共同研究者4名の枠のうち、テーマ研究に参加する平泉部門に関係する県内大学研究者の中から2名（予定）を委嘱する。

県教育委員会と大学の連携の端緒となったのは、平成18年度の第7回平泉文化フォーラムで、岩手大学および文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」と共同で開催したことである。以来、今年度の第9回までフォーラム共同開催は継続されてきた。このような経過を経て、県教育委員会は、平成19年度末から岩手大学をはじめする県内大学との間で共同研究の可能性について協議を開始した。一方、平成20年度、県内5大学が文部科学省へ申請した戦略的大学連携推進事業「いわて高等教育コンソーシアムにおける地域の中核を担う人材育成と知の拠点形成の推進」の採択により、県内大学の連携体制が確立した。平成21年3月現在、県教育委員会といわて高等教育コンソとの間で、21年4月付け「覚書」を取り交して、平成21年度から共同研究を本格実施する見込みである。

上記の各研究グループが平泉文化研究に共同して取り組むことによって、従来の考古学・歴史学が牽引してきた平泉研究に文学・美術史学・宗教学・地理学等の多様で学際的視点が加わって、より総合的な研究進展を企図するものである。

○具体的研究テーマと研究計画

研究計画は「発掘調査」・「資料収集」・「共同研究」からなる（表2）。

<発掘調査> 柳之御所遺跡および平泉文化関連遺跡の発掘調査を実施する。柳之御所遺跡については遺跡保存活用を図るため、既に平成10年度から3ヶ年の調査計画に基づいて内容確認調査を実施しており、堀内部の中心建物群や園地跡等について内容確認を行ってきた。現在、第4次計画（平成19～21年度）として堀跡の性格把握を主眼として調査を進めているところである。堀内部地区および堀跡の調査は、これまで用地買収の関係で調査できなかった北端部分が未了となっていることから、概ね平成25年度まで継続する見込みである。平成26年度以降、堀外部地区の調査に着手し、当該地区の様相を明らかにしていく計画である。柳之御所遺跡の発掘調査は平泉遺跡群調査事務所が主体となっ

表2 「平泉文化総合的研究」年次計画

		2009 H21	2010 H22	2011 H23	2012 H24	2013 H25	2014 H26	2015 H27	2016 H28	2017 H29	2018 H30	2019 H31		
発掘調査	柳之御所遺跡	東、奥内陸部に調査					掘外掘地調査							
	平泉遺跡群	調査/「平泉史」調査												
資料収集	関連資料	→												
	研究図書	→												
共同研究	柳之御所遺跡の考古学的研究	県教委・埋蔵文化財センター、いわて県立総合資料館との連携	基礎資料整理				比較研究				総括報告書発刊			
			遺物、図面、写真等	陶磁器	土木製品	器	井戸跡	建物跡	その他	その他	その他	その他	その他	その他
	宗教・思想と国際性	→												
	都市と景観	→												
	文学と伝承	→												
	文献史料の基礎的考察	→												
	「平泉文化研究年報」	10号	11号	12号	13号	14号	15号	16号	17号	18号	19号	20号		

を進める。

また、平泉町内及び周辺市町に所在する関連遺跡については、県立博物館が独自計画により「前平泉文化の研究」を平成22年度まで実施している。

将来的に平泉遺跡群調査事務所が発掘調査を行っていくことも考えられるが、

＜資料収集＞ 平泉文化に関係する資料・文献等を収集し、研究に活用する。現在、柳之御所遺跡の調査関係の資料（図面・写真・報告書等）および出土遺物類は、主に平泉遺跡群調査事務所で管理しており、必要に応じて参照できるよう整備し、一部についてはデータ化を図っている。また、平泉に関係する研究書籍、埋蔵文化財関係機関や大学等の発行する調査・研究報告等について、可能な限り収集している。収集した資料は、平泉文化研究に有効活用する意味で、県内大学関係者や共同研究者以外にも、閲覧・利用できるように配慮している。

＜共同研究＞ 県教育委員会と関係機関・県内大学との協議を経て、研究テーマとして次の5つを掲げることとした。

- ①柳之御所遺跡の考古学的研究
- ②宗教・思想と国際性
- ③都市と景観
- ④文学と伝承
- ⑤文献史料の基礎的考察

以下、各テーマの概要である。②～⑤については平成21年3月時点で研究詳細の検討が未了であることから、次年度に検討継続して内容を決定することとしており、次号にて追加報告する。

①柳之御所遺跡の考古学的研究

岩手県および県埋蔵文化財センターが実施した柳之御所遺跡の発掘調査について、再整理・検討・総括を行い、その成果を報告書として発刊する。

柳之御所遺跡については、平泉バイパス・北上川遊水地事業にともなう県埋蔵文化財センターの調査報告書（1995「柳之御所跡」）、次いで平成8年以降の県教委による内容確認調査に係る各次調査概報（岩手県教委1999～2008）および「第1次・第2次内容確認調査総括報告書」（岩手県教委2004）が発刊されている。しかし、報告書によって遺構・遺物・遺跡に係る解釈にブレが存在しており、岩手県教育委員会が柳之御所遺跡に対する公式見解が示されていない。柳之御所に対する研究者の認識のズレを生じさせる原因となった。例えば遺跡を特徴づける2条の堀に関して、「柳之御所は二重堀で防禦されていた」という言説が論文や各種出版物等を通じて流布され

たが、これまでの調査報告書では堀が同時期存在であったとの記述はなく、むしろ内・外の堀に時間差がある可能性すら示唆されていた。今年度実施した第69次調査で、堀が外堀→内堀と変遷しており、二重堀ではなかった可能性が強まった。このような問題を解消するためにも、ここで過去の調査成果を総括して、県教育委員会としての公式見解を示す必要があるものとする。

当研究は平泉遺跡群調査事務所の職員が中心となって進める。柳之御所遺跡発掘調査事業委託契約により県埋蔵文化財センターから派遣されている文化財調査員も本務として当研究に従事する。また、過去の調査に関わった県埋蔵文化財センターの調査員を共同研究員〔報償費支給対象外〕として委嘱し、過去の調査に係る情報提供等、協力を求めることとする。

平成21年度はそのための事前準備期間にあて、遺構図面・写真等の整理、出土遺物の確認を行い、基礎的な資料の整備を行う。本格的な再整理・検討作業は平成22～24年度の3ヵ年実施する。平成22年度は、出土遺物のうち陶磁器の確認、データ集計、再分類等を行う。特に国産陶器については近年の研究成果に基づいて再同定・分類を行う。また遺構のうち、井戸状遺構と便所遺構について、記録（図面・写真）の確認・整理ならびに再検討を行う。同様に、平成23年度には、かわらけ等の土器類と木製品、掘立柱建物と堀跡の整理・検討、平成24年度には、前2年間で検討した以外の遺構・遺物を扱う。この間、日本史における柳之御所遺跡の位置づけを探る意味で、東北地方を中心とする同時期の遺跡との比較研究を並行して行う。

各年度の再整理・検討の内容・成果については、年度ごと概要報告を行い、最終年度である平成25年度に全体のまとめとして総括報告書を発刊することにより、広く公表する。

②宗教・文化と国際性

③都市と景観

④文学と伝承

⑤文献資料の基礎的考察

これらの研究成果については、従来の共同研究と同様、『平泉文化研究年報』への論文掲載、平泉文化フォーラムでの研究発表という形で公表していく。

○「平泉遺跡群調査事務所」の開設

岩手県教育委員会では柳之御所遺跡の調査・研究にあたって、平泉町内に拠点を設ける必要性を認識し、平成11年度新たに「柳之御所遺跡調査事務所」を開設した。事務所は遺跡からやや離れたJR平泉駅の南側に位置する照井堰土地改良区事務所の建物を借用したものである。以来10年間、当事務所を拠点として調査・研究を継続してきた。

しかし、出土遺物および収集資料・書籍類の増加により事務所が手狭になったこと、事務所建物自体の老朽化、等から事務所移転が検討され、平成20年度、新事務所移転が実施されることとなった。新事務所建物は、柳之御所資料館北側の敷地に新規建設したプレハブを、リース契約により借用するものである。

平成21年1月、新事務所へ移転し、同時に事務所名を「平泉遺跡群調査事務所」と改称した。

本事務所は、将来的に平泉文化研究機関の設置構想実現まで、暫定的に共同研究の枠組み（A）の中核的機関として位置づけられ、研究テーマ①の推進の中心となるものである。

第9回平泉文化フォーラム 実施報告

岩手県教育委員会は、第9回平泉文化フォーラムを、平成21年2月7日（土）、平泉町立平泉小学校体育館を会場として開催した。今回のフォーラムは、前々回および前回と同様、岩手大学ならびに文部科学省科学研究費特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」（代表：東京大学大学院人文科学科准教授 小島毅）との共同開催とした。

内容は次のとおりである。

第9回平泉文化フォーラム

- 1 日時 平成21年2月7日（土） 午前10時～午後4時
- 2 場所 平泉小学校体育館（西磐井郡平泉町平泉字倉町）
- 3 主催 岩手県教育委員会、岩手大学
平成20年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究
「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」
- 共催 平泉町、平泉町教育委員会、一関市教育委員会、奥州市教育委員会
- 4 日程
 - 10:00 開会
 - 10:15～ 共同研究成果発表(1)
「平泉の市街地形成」 磯野綾（平泉文化共同研究員、千葉工業大学大学院生）
「北奥の12世紀」 関根達人（平泉文化共同研究員、弘前大学大学院・人文学部）
「12世紀奥羽における陶器の研究」
鈴木啓司（平泉文化共同研究員、福島大学大学院生）
 - 11:30～ 発掘調査成果報告(1)
柳之御所遺跡（平泉町） 平泉遺跡群調査事務所（西澤正晴・岩測計・千葉正彦）
下川原Ⅰ・Ⅱ遺跡（紫波町） 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（川又晋）
 - 13:00～ 基調講演「柳之御所遺跡の建物復元検討からみた平泉文化の特質」
玉井哲雄（国立歴史民俗博物館研究部）
 - 14:10～ 共同研究成果発表(2)
「都市平泉の成立—飛鳥から平泉へ—」
前川佳代（平泉文化共同研究員、奈良女子大学大学院）
 - 14:35～ 発掘調査成果報告(2)
白鳥館遺跡（奥州市） 奥州市世界遺産登録推進室（及川真紀）
接待館遺跡（奥州市） 奥州市教育委員会歴史遺産課（重森直人）
無量光院跡（平泉町） 平泉町文化財センター（島原弘征）
花立Ⅰ遺跡（平泉町） 平泉町文化財センター（戸根貴之）
 - 15:35 閉会あいさつ 小島毅（科研グループ代表、東京大学大学院）
 - 16:00 終了
- 5 入場者数 のべ400名

基調講演をいただいた玉井哲雄氏は「平泉遺跡群」の調査・整備指導委員であり、柳之御所遺跡の復元・整備に助言いただいている。今回の講演では、指導委員会において進めている柳之御所遺跡の中心建物復元に関わって、検討内容をわかりやすく説明したものである。柳之御所遺跡の建物が、京都の寝殿造建物に似て非なるものであり、他に類例が求められないものであること、それゆえ復元が非常に難しいものであることが述べられ、日本建築史における平泉の特殊性について改めて考える機会を与えていただいた。

なお、共同主催者である岩手大学では、地域連携推進センターが、前回に続いて『がんちゃん 歴史と文化体験バスツアー』を企画している（参加者90名）。午前は奥州市埋蔵文化財センター、胆沢城跡、柳之御所遺跡、無量光院跡を見学し、午後にはフォーラム会場に到着、合流した。

HIRAIZUMI BUNKA KENKYU NENPO

Annual Report of the Hiraizumi Studies

Contents

Articles

- Formation Process of Medieval Hiraizumi City, Jpn : Urbanization in Medieval 'Hiraizumi' from the viewpoint of Surrounding landscape **ISONO Aya** 1
- The northern part of Oshu in the 12th century : The investigation of Dougatai sutra mound **SEKINE Tatsuhito** 17
- Formation Process of Hiraizumi City : from Asuka to Hiraizumi **MAEKAWA Kayo** 31
- Research of earthenware in Ou in the 12th century :
Chiefly about in Yanaginogosyo Site in Hiraizumi, Iwate **SUZUKI Keiji** 47
- Reconstructive Study of Yanaginogosho Site, part 5
Hiraizumi Isekigun Chosa Jimusho
Archaeological Research Institute of Hiraizumi Sites 63
- The Master Plan of Synthetic Studies about Hiraizumi Culture **Iwate Board of Education** 75
- Report of the 9th Hiraizumi Culture Forum 86

Iwate Board of Education

10-1 Uchimaru, Morioka City, Iwate Prefecture 020-8570, Japan